

はしかき

アメリカは未開の荒野に、インディアンと呼ばれる先住民が自然と密着した生活を営んでいる大陸でした。そこへ17世紀の初頭からヨーロッパ人が移住し始め、インディアンを征服し、さまざまな戦争をくり返しながらかつてきた、言ってみれば新参者の国家です。「アメリカに文化などあるか」というのが、世界の先進国の人々の思いでした。

1820年、シドニー・スミスという有名な批評家は、当時イギリスで最も有力だった評論雑誌『エディンバラ・レビュー』で、有名な文句を吐きました－「この地球上で、いったい誰がアメリカの本を読んだり、芝居を見たり、絵や彫刻を鑑賞したりするだろうか」と。もちろんそんな人はいやしない、というわけです（『アメリカ文化年表』1820年の項参照）。

日本でも、知識人の間で、同じような見方がはやったものです。明治20年代、日本もようやく近代国家としてやっていける自信ができ、日本の伝統を重んじる風潮がたかまってくる、長い歴史をもつヨーロッパには精神的「文化」があるが、アメリカには低俗な物質的「文明」しかないとして、これを軽蔑する傾向が強まりました。この見方はしだいに激しさを増し、1930年、文芸評論家から政治家になった池崎忠孝は『世界を脅威するアメリカニズム』という本で、「キネマを見、ドライブを楽しみ、ラヂオを聴き、スポーツを喝采し、昼はクラブに入りたつてカルタを弄び、夜はダンス・ホールに尻を据えて男女の自由な交際を謳歌するといふ」生き方をアメリカニズムと呼び、「俗も刹那の官覚的刺激をもって無上の悦楽とする未開人を選ぶところはない」と罵倒しました。

しかしアメリカの文化は、一面ではこんなふうにならされて、否定されながらも、他面ではたいそう魅力を認められて、ものすごい勢いで日本に入ってきています。私たちは最近、平成の天皇が退位し、令和の新天皇が即位されるに際し、「三種の神器」が厳粛に受け継がれるところをTVなどで見たところですが、1960-65年頃、日本中の一般庶民が「三種の神器」と称して買い求めるのに懸命だったのは、テレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫、そして65-70年頃に追い求めた「3C」とは、カラー・テレビ、ルーム・クーラー、マイ・カーの、いずれもアメリカ文化の産物でした。ただ、いま余りにも多くのアメリカ文化が入ってきているので、私たちは目新しさを感じず、鈍感になってしまっています。その結果、私たちはともすれば文化そのものに対して鈍感になり、私たちの生活までが文化的活気を失ってきているのではないのでしょうか。

この際、アメリカの文化に目を向け直し、その成り立ちを調べたり、その特色を理解したりすることは、私たち自身の文化を活性化し、その中身を豊かにすることにつながるのではないか。私たちはそういう思いからアメリカ文化の歴史的な展開を簡潔に、しかも生

き生きと伝えることを目指して、『アメリカ文化年表』（2018年刊）をあらわしました。しかし若い人たちにアメリカの文化をもっとさらに「生きた」形で知ってもらうためには、その文化に直接関係する英語文献を読んでもらうのが最もよい方法だと思い、このテキストを編むことにしました。

具体的には、アメリカ文化の展開の中から14のとりわけ興味深いトピックを選び、それぞれについて簡単な解説をした後、歴史的な背景などを年表形式で紹介し、それから歴史上有名なドキュメントや、小説・詩歌などの古典的な文学作品、あるいは時事的な評論文などを配しました。いろんなタイプの英文を読むことになると思いますが、どれも熟読玩味に値する作品だと思います。

すでにもうおわかりのことと思いますが、私たちは文化を精神的なものだけでは受け止めていません。文化とは英語で言えば culture、「耕作」とか、「栽培」とか、「教化」とかと同じ言葉です。文学や芸術も、もちろん立派な文化ですが、アメリカは荒野から出発した国ですから、道路とか建物とか、人間の「生」を向上させるものはすべて文化と考えます。先に述べた「三種の神器」や「3C」も立派な文化であるわけです。

こう言うと、なるほどアメリカは日常的で物質的な文化は発達させたけれども、精神的な文化についてはやはり貧弱じゃないか、という意見が出るかもしれません。私はそれは間違いではないかと思います。むしろ精神文化の強烈さに驚かされることがあります。アメリカ文化がまだ原初的だった植民地時代にも、その例は容易に見出されます。

1630年、ピューリタンと呼ばれるキリスト教徒1,000人ほどのグループがボストンを中心とするニューイングランドに移住した時、指導者ジョン・ウィンスロップの説教にもとづいて“city on a hill”（丘の上の町）を建設することを使命としました。「丘の上の町」というのは、キリストの有名な説教の中に使われる文句で、いつも人に仰ぎ見られ“the light of the world”（世の光）となるべきものの意味です。単なる聖書の文句の引用ですが、植民地の建設にこんな崇高な目標をかかげた例は、他にないでしょう。そしてもちろん、現実にはこの教えに背くことを植民地はくり返すのですが、何かことあると、この使命が再確認され、アメリカの理想が説き直されることにもなるのです。大変な精神的力をもった文句と言えそうです。

もう一つ、1787年に成立した合衆国憲法の前文が“We the People”（われら人民）という言葉で始まり、その人民が合衆国憲法を ordain（制定）し、establish（確立）する、と言い切っていることに私は仰天し、感動します。People という言葉がどのようにしてでき、使われてきたか私は知りませんが、独立戦争中にそれは大きく力強い意味をもってきて、ついに国家の土台をなす言葉となったのです。言葉自体がアメリカの「文化」と言えそうです。ですから、本文中の解説（第2章参照）にもあるように、リンカンがアメリカの国家的使命として堅持を訴えた「人民の、人民による、人民のための政府」という文句に、そっくりつながって行くのです。そして20世紀に入っても、たとえば詩人のカール・サンドバーグは *The People, Yes* (1936年) という有名な詩集で、全107節にわたって people を語りまくり、賛美するのです。

People という言葉にはアメリカの人間と歴史が詰まっっていて、精神的な価値を主張しているような気がします。日本では、たとえば「わび」、「さび」のように、なるべく人目を避ける美意識がすばらしい文化をつくることが多いですが、アメリカでは逆に、威勢のよい活動がそのまま文化となることが多いようです。「半身は馬、半身はワニ」といった粗野

な人間像が魅力となって、いわばアメリカ中で騒動を巻き起こしたり、「天を摩する」ばかりに高く聳えていく建物が、アメリカ文化の象徴となったりします。またひと頃、ちょっと大袈裟に言えば、アメリカ中の公道で老若男女の人がひたすら走っている（jogging などという言葉まではやる）現象が生じました。精神的か肉体的か、発展的かあるいは自己拡散的か、もちろんいろんな要素が混じっていますが、アメリカ文化は極めてダイナミックだということが言えると思います。

アメリカの文化は、先住民の活動を別にすれば、わずか400年余りの間に広大な大陸にひろがって展開してきましたから、こういうダイナミズムに加えて、時代性にも富んでいます。もちろん時代を越えて発展してきた文化も多いですが、ある特定の時代に人目を引いた文化現象も少なくありません。そこで本書では、目次をご覧になれば明らかなように、アメリカ文化の展開を4つの時代に分け、本書のもとになった『アメリカ文化年表』の4人の共著者が、その1つずつを受け持つことにしました。4人は互いに意見を交換し、議論し合いましたが、最終的にはそれぞれの分担部分について責任を持つことといたします。各章のテーマについて、解説について、とくに英文テキストについて、読者の率直なご意見やご教示をいただけたら、この上ない幸いです。

亀井俊介

執筆担当	第1部	荒木純子
	第2部	澤入要仁
	第3部	渡邊真由美
	第4部	杉山直子
監修		亀井俊介

目次

はしがき	3
第1部 ～1799年 植民地建設から独立・建国まで	
第1章 ポカホンタスの神話ー白人を救うインディアン娘	8
第2章 「丘の上の町」ーピューリタンの使命	12
第3章 「われら人民」ー合衆国の土台	16
第2部 1800～1899年 西部開拓から産業国家へ	
第4章 「半身は馬」ー西部の化身デイヴィ・クロケット	20
第5章 蒸気船ーマーク・トウェイン、「驚異の本」を読む	24
第6章 『アंकル・トム的小屋』ー大戦争を引き起こした本	28
第7章 万国博覧会ー「世界の八番目の不思議」	32
第3部 1900～1969年 世界進出から超大国へ	
第8章 デパートメント・ストアー消費文化の殿堂	36
第9章 摩天楼ーアメリカ文化の象徴	40
第10章 ヒッピーー ^{ほうらつ} 放埒な求道者たち	44
第11章 フォークソングー民衆・放浪・反体制	48
第4部 1970年～ 文化革命、そして宇宙へ	
第12章 健康ブームージョギング、エアロビクス、ダイエット	52
第13章 ユートピアを求めてー性革命の70年代～	56
第14章 宇宙探索ー「なぜ月へ行く？」	60
あとがき マリリン・モンローーアメリカの文化を語る	64

chapter 1

ポカホンタスの神話

白人を救うインディアンの娘



キャプテン・ジョン・スミスによるヴァージニアの地図
(1624年)

ポカホンタスはアメリカの子どもにとって最も有名なインディアンの物語のヒロインである。英国からやってきて、今のアメリカ合衆国における最初の植民地をヴァージニアに建設したキャプテン・ジョン・スミスの命を、少女ポカホンタスが救ったというのである。これが史実かどうかは疑わしいものの、インディアンの土地を白人が支配することを正当化できごととして、多くの人々が信じる「神話」となった。

実際のポカホンタスはポーハタン族の首長の娘であり、白人植地で捕虜となっていた仲間を引き取る代表を担うなど、入植者にとってもインディアンを象徴する存在であった。スミスの英国帰国後、誘拐されて白人社会で生活するうちに洗礼を受けレベッカと名乗り、インディアンが使用していたタバコの栽培法を開発したジョン・ロルフに見初められて結婚した。その後ロルフとともにロンドンに渡り、インディアンの王妃として英国社交界でもてはやされた。国王にも謁見するなど北米での植民地成功の宣伝の役割も果たしたが、そのまま病死した。

ポカホンタスのこの劇的な人生は、さまざまな物語や劇や詩を通じて後世に伝わり、そのイメージも変容していく。ポカホンタスを描いた17世紀の版画と比べると、19世紀の肖像画では肌の色合いも白くなり、インディアンらしさを映すものは腕輪の羽や髪飾り、手にしたタバコ道具のキセル程度である。自然と調和して生活するインディアンが「高貴なる未開人」として憧れの対象に変わった18世紀をへて、ロマンティックな自然観の影響を受けた結果だと考えられる。現在でも、ポカホンタスの神話はディズニー長編アニメ『ポカホンタス』（1995）、また実写版映画『ニューワールド』（2005）などと、文学・映像作品にインスピレーションを与え、インディアンのイメージの源として生き続けている。

Pocahontas

- 1607 ヴァージニア会社、植民者 105 名をヴァージニアに送り、ジェームズタウンに英国初の恒久的北米植民地を建設する。飢えやマラリアで、半年で半数が死亡。
- 1608 軍人で植民地のリーダーの一人ジョン・スミス、『ヴァージニア真実記』（ヴァージニア植民地に関する最初の記録）出版。
- 1612 ジョン・スミス『ヴァージニア地図』出版。ヴァージニアの初期の詳しい紹介。ジョン・ロルフ、ヴァージニアでタバコの栽培、商品化に成功。1614 年より英国へ本格的に出荷。
- 1614 ジョン・ロルフ、ポーハタン族首長の娘ポカホンタスと結婚。
- 1616 ポカホンタス、夫ジョン・ロルフと共に渡英し、アメリカのプリンセスとして社交界でもてはやされ国王とも会見するが、翌年英国で病死。
- 1624 ジョン・スミス『ヴァージニア、ニューイングランド、およびサマー諸島総史』出版。ポカホンタス神話の起源となる部分を含む。
- 1805 英国の水夫上がりの旅行記作家ジョン・デイヴィス、小説『ヴァージニアの最初の植民者たち』で初めてポカホンタスを登場させ、好意的に描く。
- 1808 ジェームズ・ネルソン・バーカー、ポカホンタスを主題とした劇『インディアンの王女』を上演、出版。1820 年にはロンドンでも上演され、米国初演の演劇が海外で上演される最初の例となる。台詞と音楽が完全にかみあったメロドラマ。

The General History of Virginia, New-England, and the Summer Isles

by Captain John Smith



At last they* brought him* to Werowocomoco,* where was Powhatan,* their Emperor. Here more than two hundred of those grim Courtiers stood wondering at him, as he had been a monster; till Powhatan and his train* had put themselves in their greatest braveries.* Before a fire upon a seat like a bedstead*, he sat covered with a great robe, made of Raccoon skins, and all the tails hanging by. On either hand did sit a young wench* of 16 or 18 years, and along on each side the house, two rows of men, and behind them as many women, with all their heads and shoulders painted red; many of their heads bedecked* with the white down of Birds; but every one with something: and a great chain of white beads about their necks. At his entrance before the King, all the people gave a great shout. The Queen of Appamatuck* was appointed to bring him water to wash his hands, and another brought him a bunch of feathers, instead of a Towel to dry them: having feasted him after their best barbarous manner they could, a long consultation was held, but the conclusion was, two great stones were brought before Powhatan: then as many as could laid hands on him, dragged him to them, and thereon* laid his head, and being ready with their clubs to beat out his brains, Pocahontas the King's dearest daughter, when no entreaty* could prevail,* got his head in her arms, and laid her own upon his to save his from death: whereat* the Emperor was contented* he should live to make him hatchets, and her bells, beads, and copper; for they thought him as well of all occupations as themselves. For the King himself will make his own robes, shoes, bows, arrows, pots; plant, hunt, or do anything so well as the rest.

they: インディアンのこと **him:** ジョン・スミスを指す **Werowocomoco:** ウェロウオコモコ (地名) **Powhatan:** ジェイムズタウン周辺のインディアン部族の同盟の名称ポーハタンのことで、その指導者も指す。ここではポカホントスの父のこと **train:** 列 **bravery:** 華やかさ **bedstead:** ベッドの枠 **wench:** 召使いの若い女 **bedeck:** 飾る **Appamatuck:** ヴァージニアのインディアンのアポマトック族 **thereon:** その上に **entreaty:** 懇願 **prevail:** 効果がある **whereat:** そこで (関係詞) **content:** 満足させる

from Captain John Smith, *The Complete Works of Captain John Smith (1580-1631)*, Philip L Barbour, ed. (Chapel Hill and London: University of North Carolina Press, 1986), vol. 2, pp.150-51. スペリングを現代化。



キャプテン・ジョン・スミスは1607年に英国初の恒久植民地ジェイムズタウンを建設した指導者の一人である。若い頃から冒険心に富み、ヨーロッパ各地で戦争に加わった軍人でもあった。新大陸探検にも意欲的で、発見だけでなく、地図を作成したり、新世界の自然の豊かさを鮮やかに描いたりして、英国に住む人々の想像力や冒険心を掻き立てた。1609年の帰国後、ジェイムズタウンに戻ることはなかったが、1614年の探検で発見したエリアをニューイングランドと名付けた。のちにニューイングランドに渡ったピューリタンもスミスの著作を携行するなど、現在のアメリカ合衆国への植民をスミスの功績抜きで語ることはできない。

このようにさまざまなことに熱心に取り組んだスミスは多くの文章を残しているが、ポカホントスに命を救われたことに触れているものは、1624年出版のこの『ヴァージニア、ニューイングランド、およびサマー諸島総史』だけである。抜粋部分はインディアンに捕らえられ、首長のところに連れて行かれた場面で、まさしく「神話」の起源となる箇所である。スミスの頭に棍棒がまさに振り下ろされんとする瞬間にその頭を腕で包み込んで守るポカホントスの姿は、真実かどうかはともかく、たいへん劇的である。



ポカホントスの版画 (Simon van de Passe, 1616年)



ポカホントスの肖像画 (Mary Cowdeu Clarke, *World Noted Women*. New York: D. Appleton and Company, 1883)